

# 正倉院の染織品の文様について

## － 文 様 復 元 図 の 作 成 －

大 山 明 彦

奈良教育大学美術教育講座(文化財造形)

(平成13年4月27日受理)

キーワード： 正倉院の染織品、文様復元

### 1. はじめに

正倉院の染織品は、古代の染織品としてはその種類、量ともに世界最大の規模をなしており、またそのほとんどが8世紀のものであることが明らかな、由緒正しく、学術性の高いものとして知られている。

墨書銘文により伝世の明らかなものとしては、天平勝宝4年(752)の大仏開眼会用品、天平勝宝8歳(756)の聖武天皇御遺愛品、天平勝宝9歳(757)の聖武天皇御一周忌斎会用品を挙げることができる。その中でも聖武天皇御一周忌斎会用品のうち、錦や羅の道場幡はおおよそ600点を数え、その数量は膨大である。

正倉院の染織品の内には、植物の繊維による麻布や、動物質の繊維によるものでは絹繊維による錦・綾・羅・平絹・刺繍・夾纈などのほか、羊毛(詳しくは古品種の山羊の毛)による毛氈などがみられ、それらの内でも特に絹繊維によるものの種類は誠に多種多様である。そして錦・綾などの文様の種類は、今日までに錦は百数十種、綾は百種を数えることが知られている。

ところで正倉院の染織品はその伝存状態の良さからも、たいへん希有な存在として認識されている。確かに錦など、1300年以上の時を経ているとは到底思えない程の色艶を鮮明に留めている場合も珍しくはなく、麻布の類に至ってはその多くが、外見上は麻繊維の強靱さをそのまま保っているかに窺えるほどである。

しかしながらそれらの内の一部については、すでにいくつかに分断されて伝わるものもあり、また裂地の損耗・褪色により容易に図様の全容を捉えることが困難な状態となっている場合もある。またいかに正倉院の染織品の伝存状態が良いとはいえ、ことに絹繊維は幾種類にも及ぶ美術工芸品の素材の内でも、最も保管の困難な材質のものであることは否めない。錦・綾などの織物として、また夾纈など染色技法により表現され、今日奇跡的に留められているその貴重な図様が、今後いつ何時、永

遠に失われることとなるやも知れないのである。

そして文様に関してみれば、織物である事による技法上の制約等の理由により、本来織手が織りあらわそうとした図様が、当初から十分に表出されていないものと窺える場合もある。

このようなことから、このたびは多種多様な正倉院の染織品より計16点を選び、すなわち錦7点、綾6点、夾纈2点、彩絵1点と、4種類の技法によるもの、また文様についても幾何学文、唐花文、集合花文、動物文など、なるべく片寄らないように幅広く選択し復元図の作成をおこなうこととした。

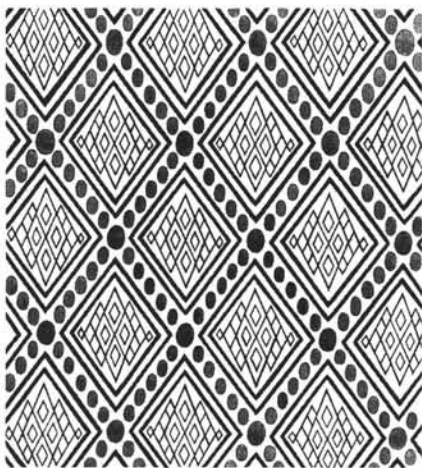
また彩絵鳥唐草文白布文様・彩絵獅子唐草文白布文様では、彩色顔料の剥落により、現状から受ける印象が、当初とは著しく異なっているのではないかと思われるので、約10～60倍の実体顕微鏡を用いての詳細な観察結果を元に可能な箇所について、彩色による復元図の作成をおこなった。

なお作図のための調査に於いては、宝物への負担を極力少なくするため、まず可能な範囲内に於いて原寸大の写真から上げ写しを行ったものを用意し、その後に実見調査を行い、実見に於いて追加確認できた箇所を描き加え、浄書する方法を自らの判断によって選択したことを記しておく。

本文中に於いて、特に所属を記さない場合は、全て正倉院宝物を示し、また綾・錦についての名称及び表記番号は全て、「正倉院の綾」(『書陵部紀要 第12号』昭和35年)、「正倉院の錦」(『同 第13号』昭和37年)による。たとえば菱格子菱文綾(no.22)のように記す。また次章に於いて、調査対象宝物の内(復元対象)とあるものが各復元図の対象であり、調査対象宝物の内には同系の文様が見られるものが含まれている。

## 2. 文様を中心とした考察

### 1. 菱格子菱文綾 (no.22) 文様 (挿図1)



挿図1 (×0.4)

#### 【調査対象宝物】

中倉202 新造屏風装第144号 (復元対象)

#### 【寸法】

織り幅不明。

文様1単位の寸法は、縦5.6cm, 横5.0cm。

#### 【文様の形状】

連珠文帯による菱格子の中に、あたかも今日云う松皮菱文であるかのような、複雑な形の菱文を配するものである。なお連珠は格子の辻にあたるものについては、やや大きくあらわされている。

#### 【考察】

菱文を主とした幾何学的な文様は、正倉院の羅の内に比較的多くみられるが、この綾の文様と同様のものは見当たらない。ただ中国前漢時代の長沙馬王堆1号墳墓出土の羅<sup>(1)</sup>の内に大変良く似たものがみられる。

この種の文様が何をあらわすのか確かなことは判らないが、他にみられるような菱形を様々に構成して創り出しただけの単なる複合的菱形文ではないものと察することができる。ともかくも同綾文は、中国前漢時代以来の伝統的な意匠を踏襲したものであることは、疑いないであろう。

### 2. 格子花文綾 (no.27) 文様 (挿図2)

#### 【調査対象宝物】

中倉202 新造屏風装第151号 (復元対象)

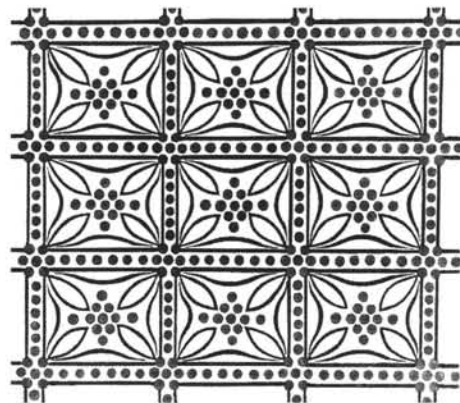
#### 【寸法】

織り幅不明。

文様1単位の寸法は、縦3.5cm, 横4.9cm。

#### 【文様の形状】

連珠文帯による格子の4隅に笹の葉形文、中央に七曜文をあらわし、さらにその4方に珠文各1ヶを配するも



挿図2 (×0.4)

のである。なお格子の辻にも連珠に繋がるように七曜文を配している。

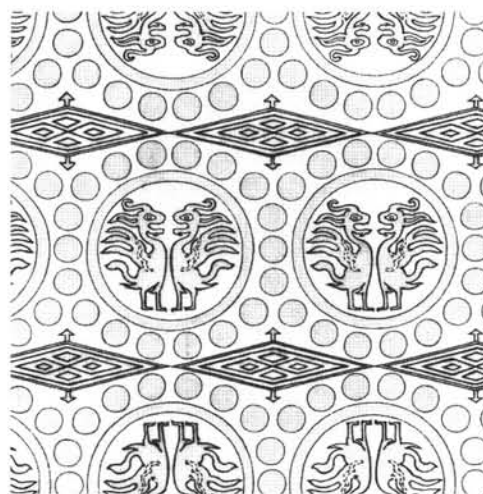
#### 【備考・考察】

法隆寺蔵品である綾大幡残欠(蜀江大幡)の脚部に同裂の使用が認められる<sup>(2)</sup>。同幡は幡頭部を欠くが、白地双竜円文綾の幡身に、格子花文蜀江錦(no.13)の縁・坪界を付くものである。

文様の構成要素である笹の葉形文は、やはり格子花文蜀江錦(no.13)の格子の4隅にみられるパルメット形を幾何学的な形態に変容したものであろうと思われる。

やはり正倉院に於ける同種の綾の存在は、次に挙げる双鳥円文綾(no.44)や双竜円文綾(no.54)などと共に、明治時代におこった法隆寺関係の遺物が混入したこと<sup>(3)</sup>によるものであろうか。

### 3. 双鳥円文綾 (no.44) 文様 (挿図3)



挿図3 (×0.4)

#### 【調査対象宝物】

中倉202 古屏風装第23号-第1扇 (復元対象)

中倉202 古屏風装第40号-第4扇

#### 【参考宝物】

中倉202 緑綾黄綾褥第103号櫃-第4号

## 【寸法】

織り幅不明。

文様1単位の寸法は、縦5.5cm、横7.5cm。(ただし文様は横位置に織られ、上下左右に打ち返されている。)

## 【文様の形状】

周囲を連珠で飾った円圏のなかに、向かい合う鳳凰らしき鳥を配する主文と、子持ち入子菱文風の副文を交互にあらわすものである。主文の連珠は、円圏どうし接する箇所では連珠3ヶを互いに共有するかたちを取り、また副文の菱文についても互いに接し、連続的にあらわされている。

## 【考察】

古屏風装古裂第23-1号、第40-4号(中倉202)に貼付のものは、いずれも濃紺色を程する幅15.0~15.5cm程の細長裂である。また長辺を端より2mm程の所で折り込み、赤い糸を用いて針目・針目間共に約1mm程の間隔で、緻密に丁寧に縫われている。その様子は、法隆寺藏品である綾大幡残欠(蜀江大幡)の脚部にみられる同種の綾と、まったく同様である<sup>(4)</sup>。また同幡には山形文綾(no.9)、入子菱文綾(no.13)、亀甲七曜文綾(no.36)の類裂、格子花文綾(no.27)が幡脚として使用されている。

緑綾黄綾褥第4号(中倉202)、古裂帖第93号(中倉202)に貼付のものなどは、上記に記すものに比べて文様が小振りであり、また主文の向かい合う鳥どうしの図様が接して、あるいは融合して織りあらわされており、一見別文様であるかのように窺えるものであることを指摘しておく。

なお同様の裂であると思われるものが、幡残欠(南倉185第127号櫃第31号、第224号)の内にもみられる。第31号は法隆寺系の二重縁幡の残欠であると思われる、その縁裂に紫・赤紫の縮絹と共に使用されているのを見る。

## 4. 双竜円文綾(no.54) 文様(挿図4)

## 【調査対象宝物】

南倉148 古屏風装第66号-第1扇

南倉179 古屏風装第55号-第1扇(復元対象)

## 【寸法】

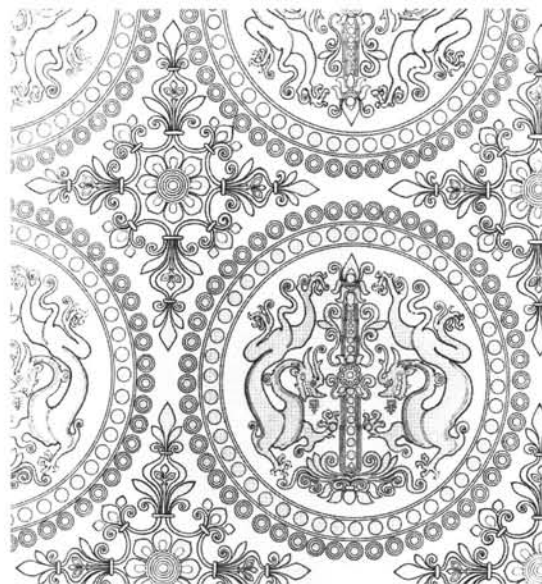
織幅は両方の織り耳を残すものがなく不明であるが、主文2つを並べると、奈良時代の平均的織幅である1尺9寸(およそ57.0cm)程となる。

主文の縦23.5cm、横21.0cm。副文の縦22.0cm、横16.0cm(いずれも推定)。

主・副文を含む文様1単位の寸法は、縦35.0cm、横30.0cm(いずれも推定)。

## 【文様の形状】

周囲を2重の連珠文で飾る円形の主文と、8弁の蓮華を中心にパルメット形を外郭が立菱形となるように纏め



挿図4 (×0.2)

あらわす副文を五の目に配するものである。主文の円形内には、蓮華座上の宝柱を中心に向かい合う2頭の竜を配している。

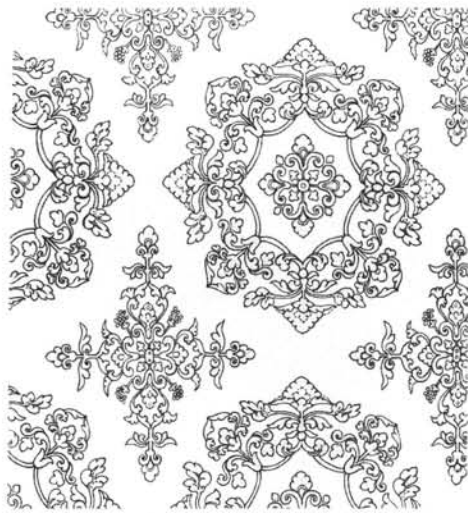
## 【考察】

副文中心部の蓮華文の蓮弁の形や、主・副文にみられるパルメット形に、大双竜円文綾(no.49)など我が国に伝存する数種類のいわゆる双竜円文綾の内では、最も中国南北朝から隋代以来の古様を残すものであると思われる。

1972年トルファン・アスターナより出土の双竜円文綾は<sup>(5)</sup>、主文部にみられる柱頂上部のマニ宝珠をあらわす形と、竜の首にみられる宝珠形(尺木)<sup>(6)</sup>の有無、龍の口元にみられる吉字とみられるものの形が異なっている以外は、ほとんど同文様の綾である。なおトルファン・アスターナ出土のものと、この綾に織りあらわされた竜の図様の内で注目すべきことは、どちらにおいても、特にアスターナ出土のものに於いて顕著であるが、首に宝珠形のみにみられる竜が、その手に玉を掴む様子をあらわす様に窺えることである<sup>(7)</sup>。

この種の文様の裂は現在、文様調査の対象とした古屏風装第55号-第1扇(南倉179)に貼付のもの(29.7cm×47.0cm)1片と、古屏風装第66号-第1扇(南倉148)に貼付のもの(23.0cm×45.5cm、18.0cm×33.0cm)2片が知られる。第55号-第1扇と、第66号-第1扇に貼付のもの内1片については、ともに23cm程の正方形の2端から細幅の帯状を付す不定形をなしている。なおまた法隆寺藏品の内の綾裂片<sup>(8)</sup>に於いても同様の不定形をなして帛面の退色がみられる。おそらくこれらはいずれも細幅の帯状縁裂を付ける、元来同じ幡の身、あるいは天蓋の鏡の部分などに用いられていたものではないかと思われるのである。

## 5. 八稜唐花文綾 (no.68・69) 文様 (挿図5)



挿図5 (×0.25)

### 【調査対象宝物】

中倉202 古屏風装第25号-第1扇 (復元対象)

中倉202 古屏風装第27号-第1扇

中倉202 古屏風装第27号-第5扇

南倉179 古屏風装第55号-第1扇

### 【寸法】

織り幅は両織り耳を残す古屏風装第25号-第1扇 (中倉202) に貼付のものによれば、52.7cm. (同裂は1幅に主文3ヶを並べる.)

主文の縦横14.0~15.5cm, 副文の縦横11.5~13.5cm.

主副文を含む文様1単位の寸法は、縦21.5cm, 横23.5cm.

### 【文様の形状】

円形の主文と菱形の副文を五の目に配する、いわゆる唐花文形式の綾である。主文は扇形花を4方に出して菱形とするものを中心として、その外側に対葉花文を含む葡萄唐草文的要素を持つ花唐草文を八稜形に構成したものである。副文はパルメット文と葡萄唐草文的要素を持つ扇形花、対葉花文 (一部に葡萄の果実状の瑞花をあらわす) を十字形に構成したものである。

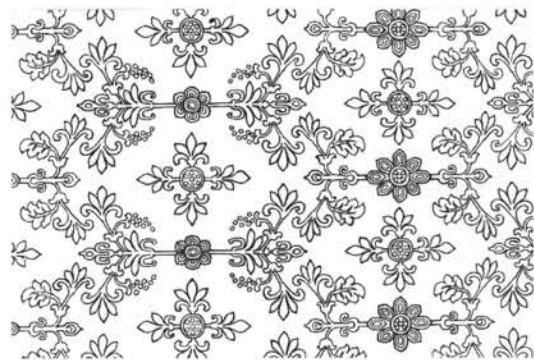
### 【考察】

古屏風装第55号-第1扇 (南倉179) 貼付のものは、副文部全体と主文部のごく一部を残す小片であるが、正倉院に唯一見られる調庸銘を有する綾として知られるものである。さらにその銘文によって奈良時代の我が国に於いて、この綾にみられる花文様が「小寶花」と呼ばれていたことが明らかとなる実例としても重要な意味を持つものであるが、他の同文綾に比較して、最も文様が精巧に織りあらわされているのを見る。

同文綾は天平勝宝9歳 (757) 聖武天皇御一周忌の齋会荘厳に使用されたことが明らかな大幡や錦道場幡に多くみられることが知られ、また錦幡 (南倉185第128号櫃第114号) の頭部鏡面には同文の黒紫綾が使用されているの

をみる。また鏡箱付属の褥 (北倉42), あるいは古屏風装第27号, 第41号 (中倉202) に貼付のものなど, かなり文様が硬化, 簡略化されて織りあらわされているものもみられ, 組織的にも平地綾文綾, 綾地綾文綾の2様みられる。聖武天皇御一周忌の頃を中心に, 多くの工房で, あるいはかなり長期に亘って, 製織されたものと思われる。なお近年報告のトルファン・アスターナ230号墓出土の裂類の内に, 同綾文とほとんど同様の織り文様である錦断片がみられる<sup>(9)</sup>。

## 6. 花枝唐草文綾 (no.89・90) 文様 (挿図6)



挿図6 (×0.25)

### 【調査対象宝物】

中倉202 古屏風装第13号-第1扇, 同18号-第1扇 (復元対象), 同40号-第4扇

南倉129-9 黄綾袍

### 【寸法】

織り幅は黄綾袍 (南倉129-9) の後身頃に使用のものによれば, 同綾は片方の織り耳を含め40cm幅を残すものであるが, 織り耳より25cmの位置から文様を打ち返した様子が窺える。この袍に使用の同種文様の綾については, 約50cmの織り幅であった事が推定される。

文様1単位の寸法は、縦7.5cm, 横21.5cm.

### 【文様の形状】

主となる文様は6弁あるいは8弁の花文を中心として左右に主枝を出し, さらに上下斜め方向にパルメット形と葡萄の果実・葉形をあらわす花枝を伸ばす形のものである。それはさながら密教法具である三鈷杵のような形を呈し, その連続する文様外郭の形が長亀甲繫ぎとなるようにあらわされている。またその間地に簡単な連珠円文を中心に4方にパルメット形を放射状に出すものを置くものである。なお主枝より出る花枝については, 葡萄の果実形と葉形をあらわすものと, あるいはどちらか一方のみとするものの3種類のものがみられる。

### 【考察】

同文綾は, 天平勝宝9歳 (757) 聖武天皇御一周忌の齋会荘厳に用いられたことが明らかな大灌頂幡の脚部地裂・裁文に多く使用されていることが知られている。



また大仏開眼会の日時を記すものであると思われる墨書銘文がみられる綾幡（南倉185第128号櫃第26号）の幡頭部にもその使用が確かめられ、なおまた神護景雲2年（768）ほかの墨書銘文がみられる粉地木理絵長方几第14号付属の褥（中倉177）の鏡表に使用されており、同文綾が大仏開眼会の頃から称徳天皇の代に至るまで、比較的長期に亘って好まれたことが窺われる。

同文綾と八稜唐花文綾（no.68・69）は、文様の構成要素、表現、使用例など共通する点が多くあり、かなり密接な関係を窺わせるものである。

## 7. 紫地鷲連珠文錦（no.40）文様（挿図7）



挿図7 (×0.4)

### 【調査対象宝物】

中倉202 古屏風装第50号－第6扇

中倉202 新造屏風装第36号（復元対象）

中倉202 古裂帖第8号

南倉185 幡類残欠第128号櫃第161号，同第129号櫃第134号9種9点の内

### 【寸法】

織り幅不明。

主文の大きさ縦11.0cm，横9.8cm，

副文の大きさ縦9.3cm，横8.0cm（推定）。

主副文を含む文様1単位の寸法は，縦15.5cm，横14.0cm（推定）。

### 【文様の形状ほか】

主文は天地左右に重角文を置く連珠円文帯とし，その中央に正面向きの鷲と，鷲の両肩上方に互に向き合う尾の長い小鳥2羽をあらわす。副文は重角文を中心に4方にパルメット文を配したものである。主文中央の鷲は頭上に蓮花様の冠を被り，首元や胸には宝玉や垂飾帯を飾る。2羽の小鳥は，中央に位置する鳥類の王者である鷲に対して，あたかも拝礼をするかのようにあらわされ

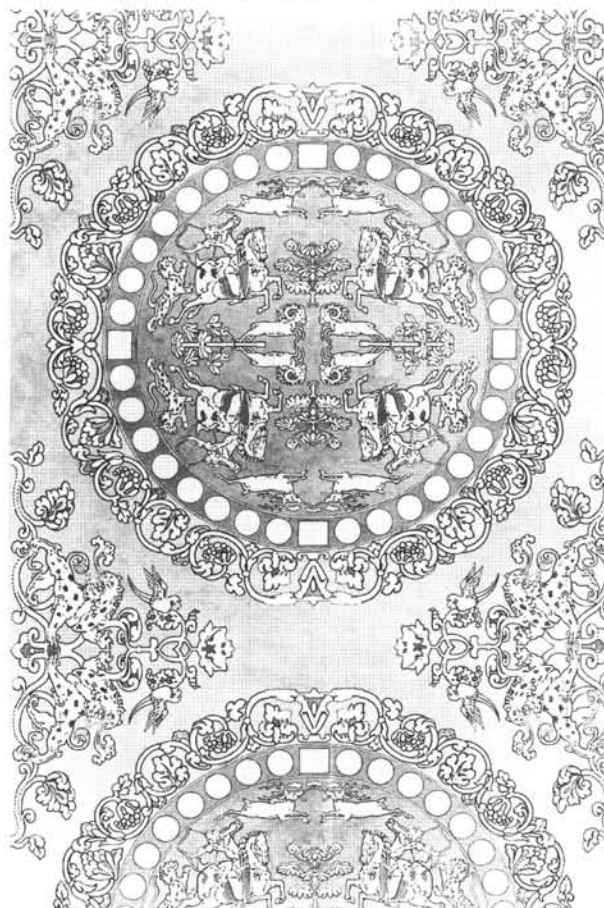
ている。

文様は全体に褪色著しく詳細な事はわからないが，濃紺・青・赤・黒紫・現在淡茶褐色を呈するものの5色の緯糸で表出されているものと思われ，地色は黒紫で，主な文様の輪郭線は濃紺としている。

### 【考察】

幡の脚端飾り（南倉185幡類残欠第128号櫃第161号，同第129号櫃第134号9種9点の内）の錦は，地色を赤とするもので，文様の寸法も一回り大きく，文様表現もやや硬い感じのものである。

## 8. 緑地狩獵連珠文錦（no.41）文様（挿図8）



挿図8 (×0.14)

### 【調査対象宝物】

北倉182 東大寺屏風装第12・13号

南倉179-76 新造屏風装第6号（復元対象）

### 【寸法】

織り幅56.5cm。

文様は縦方向に54cm程の単位で打ち返し織り表されている。

### 【文様の形状ほか】

織り幅いっぱいに円形の主文を置きその両側端に3角形となる副文を覗かせる構図である。主文は連珠円文の外周にさらに葡萄唐草文を巡らせ，その中に4組の狩獵

騎馬人物、花樹、走鹿、走羊を天地左右に対称形となるようにあらわし、副文は蓮華、葡萄の果実を有する唐草文と互に向き合う獅子と尾長鳥をあらわしたものである。主文にみられる馬上の人物は法隆寺蔵の四騎獅子狩文錦や、ササン朝ペルシャの金属器にみられる冠を被った王の姿ではなく、単に狩獵をする人物となっている。

また飛びかかる獅子は、豹と見られる程に形式化されている。互に向き合う走鹿は花枝をくわえ、中央の花樹には小動物があらわされている。また外周の葡萄唐草文は、フランス・ギメ美術館蔵品で、中国敦煌将来の鳳凰唐草文錦の主文外周にみられる唐草文<sup>(10)</sup>に、葡萄の翻った葉の様子や、葡萄の実の他に側花形の花を表す点など多くの共通点を見い出すことができるが、地域的あるいは時代的な差異によるものであろうか、当裂においては文様の表出にかなり曖昧な点がみられる。

副文の獅子は口から雲気を吐き、尾長鳥はその外形が鸚鵡を思わせ葡萄の実に飛びついてる様子である。地色は濃青緑、文様は黄の2色の緯糸で織りあらわされている。

#### 【考察】

新造屏風装第5・6・7号(南倉179)については、元来は錦幡(南倉185第128号櫃第114号)と同種の幡の幡身部として使われたものであると思われる。その理由は、①いずれの錦に於いても同様に縦方向全体に長時間引っ張られた様子がみられる。②同幡については、幡身に両方の織り耳を残す紫地の同種の錦を使用している。③左右縁はともに3cm程の幅で別裂を被せた痕跡を残す。④幡頭と幡身の堺は、緑地の同種の錦を縫製したものである。①～④のいずれの点に於いても一致することが確かめられることである。

なお同種の錦が用いられている唐散楽女舞接腰残欠第1号、噴面接腰残欠第7号(南倉121)には、ともに大仏開眼会の日時を示す墨書銘がみられるが、幡に用いられたと思われる錦には、いずれにも銘文がみられず、使用の時期は特定できない。

### 9. 紫地蓮唐花文錦 (no.72) 文様 (挿図9)

#### 【調査対象宝物】

南倉179-37 古屏風装第60号-第4扇(復元対象)  
中倉202 函装第14号

#### 【寸法】

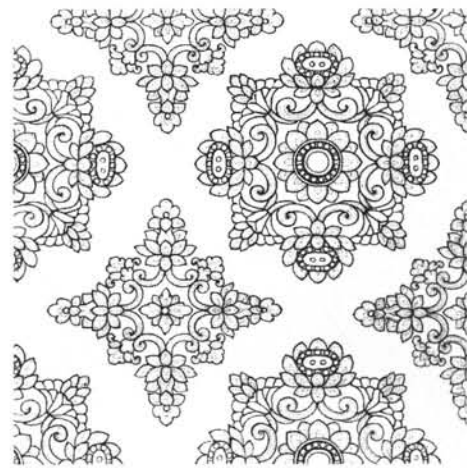
織り幅不明。(古屏風装第60号-第4扇(南倉179)に貼付の錦は、縦53.5cm、横26.5cmを残すものであるが、横並びに主文3ヶを認める。)

主文の大きさ縦7.8cm、横8.0cm。

副文の大きさ縦7.8~8.0cm、横7.8cm。

主副文を含む文様1単位の寸法は、縦13.0cm、横13.3cm。

#### 【文様の形状ほか】



挿図9 (×0.4)

外形をおのおの円形と菱形とする主・副文を五の目に配する、紫地のいわゆる唐花文形式の錦である。主文は8弁の重弁蓮華文を中心に置き、外区に斜向の蓮花と、側面向きの蓮花の蕾を有する荷葉を交互として、これを巻蔓をあらわす弧線で繋ぎ、副文は4弁花を中心に置き、外区に斜向の蓮花と、扇形の側花を交互として、これを主文同様に繋ぐものである。文様は白・黄・青・赤・緑・黒紫の6色の緯糸で表出され、すべて暈廻の表現になるものと思われる。

#### 【考察】

綾継分房付幡(南倉185第128号櫃第51号、第249号)の幡頭部の鏡にみられる錦は、ほとんど同様の文様であると思われるが、蓮華文の蕊を2重にあらわす事と、副文の中心部の4弁花に間弁がみられない事など、細かな相違点がみられる。

作図にあたっては、古屏風装第60号-第4扇(南倉179)に貼付の錦を主としたが、当裂に於いては、織技上の制約あるいは残存状態により文様輪郭が不明瞭な点があったので、文様の寸法が大きく、織りの表現もやや固い感じがするが、同種の文様が明瞭に織りあらわされており、なお残存状態が良い函装第14号(中倉202)の幡脚端飾りにみられるものを参考とした。

### 10. 赤地唐花文錦 (no.77) 文様 (挿図10)

#### 【調査対象宝物】

南倉179-12 古屏風装第60号-第6扇(復元対象)

#### 【寸法】

織り幅115.0cm。

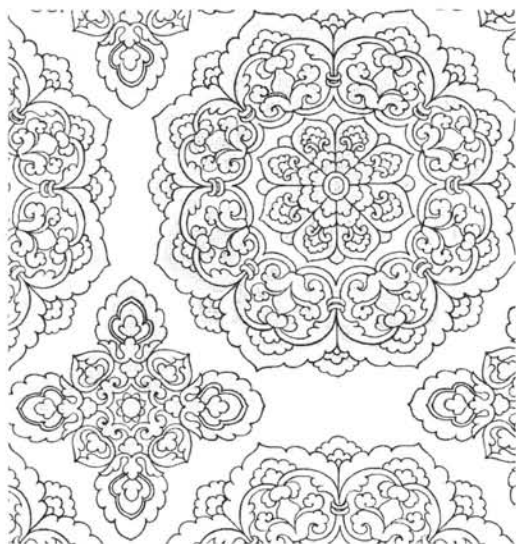
主文の大きさ縦23.0cm(推定)、横19.5cm。

副文の大きさ縦16.6cm(推定)、横14.6cm。

主副文を含む文様1単位の寸法は、縦27.6cm(推定)、横28.0cm。

#### 【文様の形状ほか】

外形をおのおの円形と菱形とする主・副文を五の目に



挿図10 (×0.2)

配する、赤地のいわゆる唐花文形式の錦である。主文内区は、黄地に8弁の重弁蓮華文として、外区は結節を有する唐草文を8弁の扇形花文にまとめたものとし、副文は白地に8弁の蓮花文を中心として、米字型となるように列形の花文と小さな対葉花文を交互に配したものである。文様は白・黄・青・赤・緑・黒紫の6色の緯糸で表出されているが、すべて暈縹の表現になり、青・赤・緑の3系統の配色になる。各色の暈縹の段は文様の外郭より、青系では白・青・黒紫、赤系では白・赤・黒紫、緑系では黄・緑・黒紫の各々3段になる。ただし緑系のもので、黄とすべきところを白であらわす箇所がみられるが、これは地色との関係上、変則的ではあるが効果的な表現法が取られたものであろう。また文様の輪郭は主・副文共に、地の赤色に接する場合には黒紫であらわし、その他の箇所は赤であらわしている。

#### 【考察】

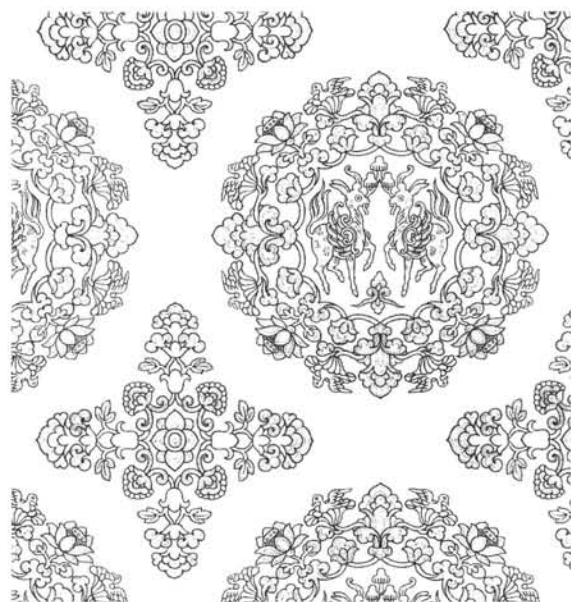
この錦においては両方の織り耳が残り、織り幅が115.0cmで、主文5ヶを横並びに配するものがあることが知られている。またその裁断の様子と寸法から、この裂は夾縹羅幡（南倉185第127号櫃第131号）と同類の幡頭鏡部に用いられたものであることが推定される。

八角鏡金銀山水八卦背第1号（南倉70）に付属の鏡箱蓋表貼付の錦は、主文の大きさが縦28.2cm、横27.0cmであり、地色は現在白色を呈するものである。また文様が古屏風貼付のもの他に比べ大振りであり、しかも文様の表出がより精巧である。文様をあらわす輪郭線は織物でありながら、筆意を感じさせる程である。

なお同文の錦で地色を緑地とするものが夾縹羅幡（南倉185第128号櫃第187号、247号）の幡頭鏡部にみられ、方形天蓋残欠第19号（南倉182）には、同文の錦で赤地のものを裁文に、緑地のものを本体側面縁に用いられているのを見る。また大仏開眼会の日時を示す墨書銘がみら

れる帯緒類第3号緑綾几帯（南倉147）の端飾や、紫綾袖残欠第6号緑裂（南倉139）にも使用が認められる。いずれの場合にも、その赤あるいは緑の地色と文様の出具合等、使用に当たって意を尽くした様子が窺われ、同文錦が他の錦にも増して、特に珍重されていたものであることを察することができる。

#### 11. 赤地麒麟唐花文錦（no.100）文様（挿図11）



挿図11 (×0.16)

#### 【調査対象宝物】

中倉202 新造屏風装第40号（副文の復元対象）

中倉202 古裂帖第651号

南倉185 幡類残欠第128号櫃第119号錦道場幡（復元対象）

南倉185 幡類残欠第129号櫃第135号夾縹羅幡

#### 【寸法】

織り幅は不明。

主文の大きさ縦27.0cm（推定）、横24.0cm。

副文の大きさ縦22.0cm（推定）、横20.0cm。

主副文を含む文様1単位の寸法は、縦41.5cm（推定）、横36.0cm。

#### 【文様の形状ほか】

外形をおのおの円形と菱形とする主・副文を五の目に配する、赤地のいわゆる唐花文形式の動物窠文錦である。

主文内区には、白地に1枝の花枝を共にくわえ向かい合って立つ麒麟をあらわす。また麒麟の下方には花文状の雲気文を配し、外区には扇形花、斜向の蓮華、水禽がうづくまる荷葉などを弧線を描く唐草で繋ぎ纏める。

副文は白地に、間弁を有する4弁花を中心に扇形花を主文同様に唐草で繋ぐものである。主副文ともにみられる花卉などに、雲状の巻き込みがみられる点が特徴的である。

文様は白・黄・青・赤・緑・黒紫・現在茶褐色を呈するもの（以後現茶と記す。）の7色の緯糸で表出されているが、すべて暈綯の表現になり、青・赤・緑・現茶の4系統の配色になる。各色の暈綯の段は文様の外郭より、青系では白・青・黒紫、赤系では白・赤・黒紫、緑系では黄・緑・黒紫、現茶系では白・現茶・黒紫の各々3段になる。なお主文の内区と地の間、つまり主文の唐草文円帯部分は黒紫地としている。そして地色が赤・白となる場合は、文様の輪郭線を黒紫であらわし、地色が黒紫となる場合は、文様の輪郭線を赤であらわしている。

#### 【考察】

織り幅は不明ながら、夾纈羅幡（南倉185第129号櫃第135号）の幡頭部鏡に使用のものについては、両端のものの過半を欠くが、織り幅方向に主文3ヶを並べるものであり、織り幅は少なくとも65cm以上あることが知れる。ただしこの錦に於いては、錦道場幡（南倉185第128号櫃第119号）や馬鞍第8号（中倉12）の褥などにみられるものよりも、文様の寸法が、主文の大きさ縦22.0cm（推定）、横18.2cm、副文の大きさ縦17.4cm（推定）、横16.0cm、主副文を含む文様1単位の寸法は、縦33.3cm（推定）、横28.6cmで、一回り小さい。

なお当錦に組織・染色の様子・風合いなどが、たいへん良く似ている赤地唐花文錦（no.77）の場合、文様が小型のものについては、主文5ヶ並びで織り幅が115.0cmであることが知られており、当種錦に於いても文様が小型のものについては、織り幅が100cmを越える、いわゆる広幅の錦である可能性があることを指摘しておく。

なおまた7色の緯糸のうち、現在茶褐色を呈する色については、配色効果を考慮に推定すると、明るい紫系の色が挙げられる。

### 12. 紫地ブドウ唐草文錦（no.116）文様（挿図12）

#### 【調査対象宝物】

中倉202 古屏風装第50号—第6扇（復元対象）

南倉179 新造屏風装第8号

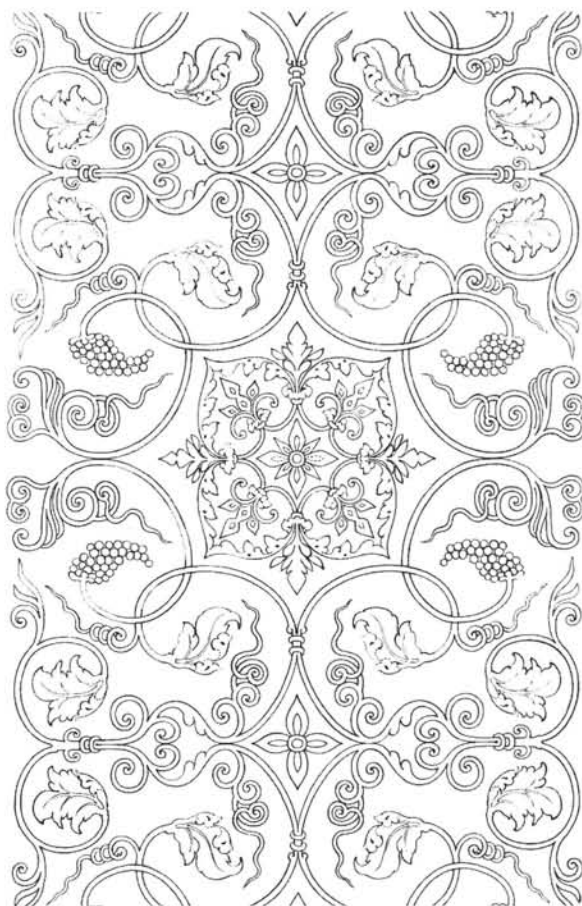
#### 【寸法】

織り幅57.0～78.5cm

文様は縦方向に約58.0cmの単位で繰り返し織りあらわされている。

#### 【文様の形状ほか】

織り幅いっぱいには結節・果実・葉脈のある葉・巻き蔓を有する葡萄唐草文を対称形にあらわすものである。裂中央部の間地に複弁を有する4弁花文を中心とする連続対葉花文と、単純な4弁花文が経糸方向に交互に配され、それらを葡萄唐草文が伸びやかに巡回閉繞するかのようになり、あらわされている。地色は紫、文様は黄の2色の緯糸で織りあらわされている。



挿図12 (×0.13)

#### 【考察】

同種の錦が用いられている唐古楽破陣楽接腰残欠第4号其1、案君子半臂第9号（南倉119）には、共に大仏開眼会の日時を示す墨書銘がみられる。

また法隆寺蔵の葡萄唐草文錦褥の表には、同種の錦が用いられており、その芯の麻布には、常陸国の国名と天平勝宝年間の期日を示す墨書銘がみられる<sup>(11)</sup>。

なお碧地錦半臂残欠第2号（南倉134号）、錦縁飾残欠第67号（南倉148）などにみられる葡萄唐草文錦は、一回り大振りの同系文様の錦である。

### 13. 紫地獅子奏楽文錦（no.117）文様（挿図13）

#### 【調査対象宝物】

中倉202 新造屏風装第20（復元対象）・21・161号

南倉185 第127号櫃玻璃装古裂第473号

南倉185 第129・130号櫃古裂帖第777号

#### 【寸法】

織幅は両方の織り耳を残さないで不明であるが、文様を織幅いっぱいにあらわしたものであるとして推定すれば、平均的錦の織幅である1尺9寸（約57cm）程となる。文様は縦方向に約41.5cmの単位で繰り返し織りあらわされている。

#### 【文様の形状】





挿図13 (×0.12)

織り文様は、中央に両手を上げ、振り向きざまに立ち上がる獅子をあらわし、獅子の左右に宝相華唐草文と、獅子を讃えるかのようにそれぞれ別種の楽器を演奏する楽人をあらわしたものである。宝相華文と楽人の様子は、あたかも雲上の奏楽天人を想わせる。

#### 【考察】

文様については、獅子の振り向く姿は自然観察的にはやや矛盾があるようだが、その動勢が絵画的にみごとにあらわされており、大きく口を開け巻き毛のあるたてがみを有する獅子は中国開元9年(721)の興福寺断碑にみられるものを想起させるものである。またその大腿部には、古代中国における聖獣であることの一表現である雲気文から発展したものであると思われる花卉形がみられる。

宝相華は、柘榴の実を想わせる子房形を、いずれも巻き込みのある苞と花卉で包み込む形のものを主としており、茎を交差させ、また蔓状の結節部を有する。このような形の宝相華は中国盛唐期の遺品に多くみられるものであるが、それらに比べこの錦のものは各宝相華が獅子の体から派生しているかのようにみられ、獅子と唐草の関係をあらかず表現が曖昧となっている。やや後期的な、あるいは中国製ではない、日本の様な周辺地域の製作になる場合の特徴を示すものとして、捉えるべきであるかもしれない。

さて楽人は獅子の両側にそれぞれ3体ずつ配されているが、向かって左側には上段より、縦笛(尺八)を吹く者、4絃の琵琶を背にし弾ずる者、両手を上げ腰鼓を打つ者を、同じく向かって右側には上段より、簫を吹く者、竖琴(匏琴)を弾ずる者、5絃の琵琶を撥を用いて弾ずる者をあらわしている。なお簫と5絃の琵琶についてはいずれも完形を残すものではないが、簫を吹く者については、新造屏風装第20・21号(中倉202)などにみられる同人に於いて、口元に吹き口をあらわすと想われる

ものが確かに認められる。また5絃の琵琶については鹿首部より先を残さず、また絃の1本1本が表現されるものではないが、その槽の形が正倉院宝物の5絃琵琶のものと同様であることから容易に判断されよう。なお楽人については、各人それぞれに特徴のある冠帽を被っているが、中でも縦笛を吹く者と4絃琵琶を背にする者は頭上に嵩高い帽子を、また腰鼓を打つ者は蓮の葉を伏せた形のを被っている。そして衣服には、縦笛や簫を吹く者にみられるように、襟が立ち上がり前衿の垂領で袖に襲のある鰭状のものを付くものや、4絃琵琶を背にする者のように盤領で領布のようなものを胸前で結ぶ様子を示すものがみられる。

当裂は、紫地に黄1色で文様を表出するものであるが、縦笛をあらわす場合には、吹き口から中程までは紫で、また中程から先の余白の色が紫となる部分では黄で織りあらわしているのを見る。また竖琴の弦を1本ずつ織りあらわすなど細かな表現上の工夫が窺えるのである。このように紫地に黄色で文様をあらわすことについては、これは紫紙金泥経と同様の色彩効果を想定したものであると思われる。正倉院宝物の中には、ほかに最勝王経帙(中倉57)やいわゆる蘇芳色(黒紫色)の地に金泥あるいは銀泥描きによる献物几・献物箱などがみられ、また東大寺法華堂諸尊、新薬師寺十二神将像などの着衣の文様表現の内にもみいだすことができる。我が国の奈良時代において、このような色彩表現が、目も艶やかな暈縹彩色とともに大変好まれたものであることが窺えるのである。

なお明治時代に東京国立博物館に頒布された正倉院裂<sup>(12)</sup>の内に、同種錦の獅子右側下段の楽人の一部分をあらわす小断片がみられるが、これは正倉院藏品中にはみられない箇所を残すものである。

#### 14. 彩絵鳥唐草文白布文様・彩絵獅子唐草文白布文様

(カラー図版1・2)

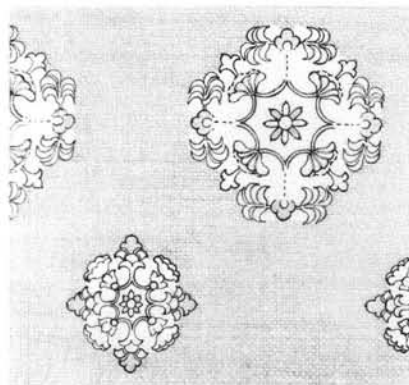
##### 【調査対象宝物】

南倉134-9 曝布彩絵半臂残欠

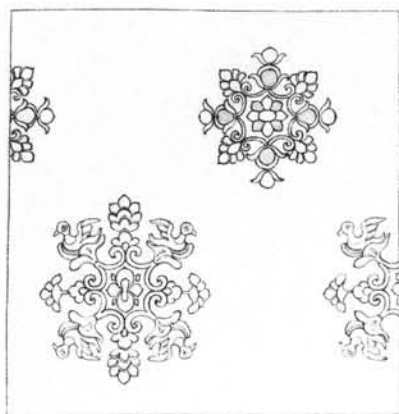
##### 【地裂の麻について】

地裂の麻は、平成2・3年におこなわれた正倉院事務所の繊維材質調査<sup>(13)</sup>で苧麻であることが明らかとなっているものであるが、織り密度は経21~22本/cm、緯33~40本/cmであり、正倉院の麻布の内でも、大変織り密度が大きく、また織り目も良く詰んだものである。また後ろ身頃の左右両端に織り耳を残す事が確認でき、織り幅は60cmであることが確認できる。これは延喜主計式諸国輸調条に、質布とあるものの織り幅2尺と一致する<sup>(14)</sup>。

なお何度も水に曝したかのように白く、風合いも大変柔らかである。



挿図14 (×0.35)



挿図15 (×0.35)

#### 【文様の形状ほか】

文様は左前身頃下段にみられる花枝文を除いては、前後両見頃ともほとんど左右対称形にあらわされる。文様の外郭は部分的にはズレがみられるが、ほとんど一致する事が確かめられる。

前身頃には、上段に花枝をくわえるものを含む2羽の鵝、中段に花枝にとまる1羽の鸚鵡、下段には同じく花枝にとまる錦鶏を思わせる尾の長い鳥が描かれる。いずれの花枝文についても蓮華と荷葉が主にあらわされているが、下段の花枝文には撫子を思わせる5弁の花や、上部に火炎状の蕊を持つ側面花がみられる。後ろ身頃には、上段に蓮花や葡萄の果実状の蕊を持つ大振りの宝相華唐草文と、その左右の蓮華座上に片足立ちする2羽の鴛鴦が向かい合わせに描かれる。下段左右には宝相華の花枝を銜える2頭の獅子をあらわし、間地には蓮華花枝文と飛蝶を配している。

#### 【使用顔料について】

肉眼観察の結果、推定される各部における使用顔料について表面（前身頃）と裏面（後ろ身頃）に分けて列記する。ただし下地白色顔料と輪郭線の墨・朱と、花文の中心部にみられる墨については特記しない。

以下文中に云う黄は藤黄（ガンボージ）、緑は岩緑青、青は岩群青、朱は水銀朱、赤紫は臙脂、黒は墨、金は金泥あるいは金箔であると思われる。緑・青ともに粒子を

確認できるほか、これらの顔料が使用されたものと思われる箇所は、地裂の麻が焼けこげた状態を示しており、文様の形に沿って穴があいた箇所もみられる。透明感のある淡茶については、今日云う朱土などの土系の顔料と藤黄の混色が考えられるが確かなことは解らない。また一部に、鉛丹と推定されるほのかに赤味を有する黒がみられるがこれについては後述する。

#### 表面（前身頃）

上段に位置する2羽の鵝については、胸部と体側面の一部に赤紫、腹部と背中の中羽などの輪郭線内側に黄、体側面の羽毛に緑、翼の2列目の羽根に赤紫が、また手前の鵝がくわえる花枝文の茎には金、苞と葉には緑がみられる。

中段に位置する鸚鵡については、体側面の一部に赤紫、体側面の羽毛に黄・緑、翼と尾羽根の輪郭線内側に黄が、また蓮華を主体とする花枝文の茎には金、葉と花弁には黄・緑・青・赤紫、蕊には黄がみられる。

下段に位置する錦鶏を思わせる尾の長い鳥については、頬・背中・冠羽・尾羽根の先に黄、腹部と尾羽根に朱・赤紫、頭部背面に緑、翼の一部に青が、また花枝文の茎には金、葉と花弁などには黄・緑・青・赤紫・黒がみられる。なお左衽のみに配された花枝文においても同様の顔料がみられる。

#### 背面（後ろ身頃）

上段の宝相華の左右に位置する花座上の鴛鴦については、前頭部に黄、首の飾り羽根に黄・赤紫、背中と翼の2列目の羽根に赤紫、頬と腰の飾り羽根に朱（顕微鏡写真1）、嘴と脚に金がみられる。宝相華においては、茎と左右の花中心部にみられる果実状の部分に金、鴛鴦の乗る花座上面には緑が、葉・苞・花弁の各所には黄・緑・青・赤紫・黒がみられる。

下段左右に位置する獅子については、躰の主なる箇所に緑と青（顕微鏡写真2）、腹部と前後脚部の内側と脚の裏に赤紫（顕微鏡写真3）、大腿部の花弁形と肘・踵の巻き毛には金・緑・黄・赤紫がみられる。なお向かって左側に位置する獅子大腿部の花弁形内側には、朱の輪郭線より順に、黄・赤味を有する黒・赤紫がみられる（顕微鏡写真4）。飛蝶の羽根にはやや透明感のある淡茶がみられる（顕微鏡写真5）。

#### 【彩色手順ほか】

作画の際には、中国旅順博物館蔵品で新疆省発見の唐代紙本佛画断片<sup>15)</sup>などにみられるような、図様に沿って針穴のある左右対称形の型紙様のものを用いたものであると推定される。

推定される彩色手順は、最初に淡色の墨線による大まかな文様輪郭をあらわした後、文様の部分にのみ白色顔料を塗布する。次ぎに主に暈綯の配色による彩色を施した後、朱と獅子の顔面・脚部などには濃墨を用いて、括

りの線描を入れ完成させたものと思われる。ただし背面上段の宝相華においては、墨線による下描は行われていない。なお獅子の大腿部にみられる花卉形などについては、彩色あるいは朱線による括りの段階に於いて、下描の墨線による形態を自在に変更し完成させた様子が窺える。下描の墨線による花卉形は、諸所に翻る様子をあらわすものであるが、最終的には翻りを持たない花卉形に改めた様子が窺えるのである。

当図様が暈縹彩色を主とした表現になるものであると思われることについては、まず宝相華・花卉文の花弁・葉などの朱による輪郭線のすぐ内側に、はっきりと黄がみられ、さらにそれらの内側に緑あるいは赤紫がみられるものが多くあり、文様の最中心部に当たる位置に墨と思われる黒がみられること、そしてそれらとは対照的に、青がみられる花卉（背面上段宝相華右側の果花状の蕊を持つ花の花弁）など（顕微鏡写真6）においては、朱の輪郭線の内側に決して黄がみられないこと、これらのことを奈良時代の暈縹彩色の様子を大変よく残す漆金薄絵盤（南倉37）や、粉地彩絵八角几第11号（中倉77）などにみられる例に照らし合わせ考察すると、各暈縹の段数については不明ながら当宝物にみられる彩色が奈良時代の代表的暈縹彩色の特徴を残すものであることがわかる。

つまり奈良時代の代表的暈縹彩色の特徴である「紺・丹・緑・紫」に言いあらわされる青・赤・緑・紫系の4つの色相系の内、青・紫系の場合には、各暈縹の最明色（つまり通常は、輪郭線のすぐ内側に当たる部分）は白とするが、緑・赤系の場合には、同部分を黄色とすることと一致するのである。また各暈縹の最暗色（通常は、文様の最中心部）は墨とすることや、先述の群青あるいは緑青によるものと思われる麻布地の焼けた状況に照らし合わせても、当図様が暈縹彩色を主とした表現になるものであることは明白である。

さて先にふれた獅子の大腿部にみられる花卉の輪郭線内側のさらに内側にみられる灰かに赤味を有する黒色の顔料は、奈良時代の代表的暈縹彩色の内、赤系暈縹の文様の外郭より内側に向かい、黄・鉛丹・鉛丹の上より臙脂の順に3段に彩色されたもののうちの鉛丹に相当するものと思われる。鉛の化合物である鉛丹は保存状態によっては、灰色または黒色に変化することもある。そしていずれの場合でも、艶やかな特有の材質感と灰かな赤味を有する場合が多い。

#### 【考察】

復元図作成に於いては、文様外郭の不明な個所については紙地のままとし、塗布顔料が不明な個所については、白色顔料塗布に留めた。

なお文様調査対象宝物の襟・上前衽にみられる霞地唐花文錦（挿図14）と袖にみられる唐花浮文錦（挿図15）

の文様略図を参考のために示す。

共に損耗・褪色が著しく不明な点が多いが、霞地唐花文錦については、緑・黄緑・紫・現在赤味を有する淡茶の4色の緯糸が確認でき、文様は蓮花と荷葉を主とする唐花文形式にあらわすものであること、唐花浮文錦については緑・淡青・紫・現在淡褐色・現在赤味を有する淡茶の5色の緯糸が確認でき、文様は前者と形式、趣を同じとするものであることがわかる。

なお唐花浮文錦には、荷葉の中にうずくまる鳥があらわされているのをみる。この様な文様は正倉院染織中では、唯一赤地麒麟唐花文錦（no.100）の主文部に於いてみられるのみである（挿図11参照）。

#### 15. 縹地花葉文夾縹羅文様（挿図16）



挿図16 (×0.2)

#### 【調査対象宝物】

北倉182 東大寺屏風装第51号

中倉202 古屏風装第31号－第4扇

中倉202 古屏風装第32号－第3扇

南倉185 幡類残欠第127号櫃第19号夾縹羅幡の幡頭、幡身第1・2坪目（復元対象）

南倉185 幡類残欠第129号櫃第84号夾纈羅幡の幡身第1  
～3坪目

#### 【寸法】

文様1単位の寸法は、縦66.5cm、横26.8cm

#### 【文様の形状ほか】

文様は牡丹花を想わせる宝相華を、集合花文として纏めあわすものを主として、また間地には小花卉文を散らすものである。主となる花文については、おそらく2種以上の版型を用いて重ね染めする事によって、暈綯の表現をとるものであると思われる。染色については主に青系、赤系（現在赤褐色を呈する）、緑系、赤紫系（現在淡褐色を呈する）の4系統の暈綯の配色になるものと思われるが、一部に黄緑系と云うべきものもみられる。地色についても青、赤あるは赤紫、黄緑とするものがみられる。

#### 【考察】

この種の夾纈花文羅は、上記文様調査対象宝物以外にも、夾纈羅幡（南倉185第129号櫃第118号）の幡頭、幡身第1・3坪目にみられる。正倉院には、ほぼ完形に近い同種の夾纈羅幡が3旒伝わることが、知られている。

東大寺屏風装第51号（北倉182）と古屏風装第31号－第4扇（中倉202）に貼付のものは、上記夾纈羅幡と同種の幡の幡身部に、古屏風装第32号－第3扇（中倉202）に貼付のものは、同種の幡の幡頭部に2つ折として用いられたものであろうと思われる。

東京国立博物館蔵品で上記夾纈羅幡と同種のものと思われるもの<sup>16)</sup>については、幡頭部には同種の夾纈羅が使用されている。また注目すべきことに、第1坪目に主文の一部花文を同形とする同種の夾纈羅の類品とも云えるものが使用されている。

### 16. 白地花鳥文夾纈純文様（挿図17）

#### 【調査対象宝物】

北倉182 東大寺屏風装第50号

南倉179 古屏風装第59号－第2扇

南倉185 幡類残欠第126号櫃第149号其2・其5 夾纈純幡  
（復元対象）

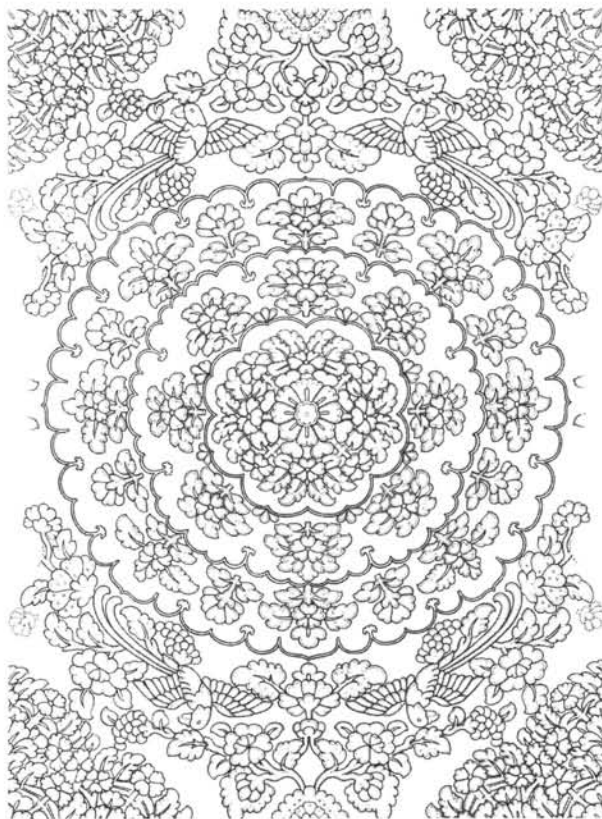
#### 【寸法】

文様1単位の寸法は、縦78.0cm、横28.5cm

#### 【文様の形状ほか】

文様は、大振りな集合花文である。花卉に小さな切り込みを有する開花蓮華文を中心として、その周囲に大きく円形となるように、しかも3重にたくさんの小花卉文を巡らせる集合花文を主とし、それを囲むように尾の長い飛鳥と細い茎による唐草様の花葉文を配している。なお主文の3重の円圏は、中国盛唐時代にみられる花文に特有の花弁形を連続し、外形を円く纏めるものである。

染色については、元來幡として仕立てられた際に別裂



挿図17 (×0.14)

によって覆われていたため、今日も比較的鮮明な色合いを残す夾纈純幡（南倉185第126号櫃第149号其2）によれば、青・緑・黄緑・赤（現在濃い赤褐色を呈する）、赤紫（現在赤紫がかった淡褐色を呈する）の5色によるものと思われる。

#### 【考察】

夾纈純半臂残欠第12・13号（南倉134）の身頃に使用の裂や、正倉院の夾纈遺品中の内でも白眉のものとして知られる紺地夾纈純襦（南倉150褥類第14号）の表裂などの夾纈による花鳥文系純の多くは、伝存状態の良否による変褪色の状態を考慮に比較すれば、花様文を構成する葉や花卉の形態、染色等に多くの共通点を見出すことができる。

また円圏で囲まれた主文を、さらに唐草様の花葉文で囲むと云う大まかな文様の構成という点からみれば、浅縹地大唐花文錦（no.75）や赤・白地唐草花鳥文錦（no.89）などの錦は同趣向のものといえよう。特に赤・白地唐草花鳥文錦とは小花文、尾の長い飛鳥など、文様を構成する要素についても共通する点が多い。さらに記するならば、同種錦が、当夾纈純が用いられている夾纈純幡の幡脚部垂端飾りに用いられているのを見る。



### 3. まとめ

復元図作成は、第1の目的として冒頭に述べたように、いくつかに分断されて伝わるものや、裂地の損耗あるいは織物である技法上の制約等の理由によって、文様の全容が明らかでないものについて、図面の上で復元し、可能な範囲に於いて、文様の全体像を明らかなものとするものであり、今回の復元図作成はほぼ所期の目的を果たし得たのではないかと考えている。

また同時に、たとえば八稜唐花文綾 (no.68・69)、花枝唐草文綾 (no.89・90) に於いては、ともに正倉院の染織品中に多くみられ、正倉院染織を代表する綾と云われるものであるが、そのどちらの文様に於いても、パルメット文と葡萄唐草文的要素を持つ複合的なものであり、これらの綾がその文様からも、また使用例に於いても大変近い関係にあるものであることが察せられること、そして、双竜円文綾 (no.54) に於いては、胴体部に宝珠形をあらわす竜が、なお手に珠を持つものであることを指摘した。また紫地獅子奏楽文錦 (no.117) に於いては、これまで語られてきた楽人に加え、笙を吹く者、堅琴を弾ずる者、5絃の琵琶を撥を用いて弾ずる者のあることなどを明らかにし得た。

なおまた曝布彩絵半臂残欠にみられる彩絵に於いては、これまでに朱と墨の線描以外に、金・青・緑などの顔料がみられることが知られていたが、裂地にみられる群青あるいは緑青による焼けの状態や、顕微鏡観察によって確認された青・緑・黄など種々の顔料の残り具合から、その様子が我国奈良時代の暹羅彩色にみられる特徴を示すものであることを発見し、またその他のものについても幾つかの新たな知見を見出すこととなった。

復元図については、図中に於いて白抜き、または破線であらわすに留まる箇所をはじめ、今日も継続されている正倉院染織品の整理・修理によって、補訂されるべき資料が見出され、より完全な復元を行うことができることを願うものである。

上げ写しに使用した写真、復元完成図の撮影は、宮内庁正倉院事務所山中五郎技官による。調査にあたっては、尾形充彦整理室長はじめ正倉院事務所の多くの方々の手を煩わせた。末筆ながらここに記し、各位に対しての深い感謝の意をあらわしたい。

なお平成12年7月1日に、朝日新聞社より発行された宮内庁正倉院事務所編『新訂正倉院宝物染織』(上)に於いて、本稿復元図を主として掲載の運びとなったが、出版物の性格上、簡略化した箇所もあり、またその後気づくこともあり、改めてここに全文を草する次第である。

### 復元図についての凡例

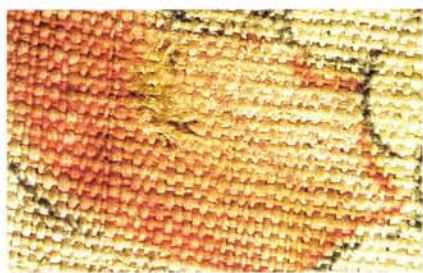
- 図の天地方向は、図様に併せたので、双鳥円文綾 (no.44) と双竜円文綾 (no.54) に於いては、組織上の縦横方向と一致しない。
- 作図に於いては、たとえば連珠円文などの場合には、原宝物では楕円形となるものを作図に於いては、正円となるように矯正してあらわしたものがある。
- 綾・夾纈など、実際には文様の輪郭線が実線として表出されていないものについては、文様理解のためこれを実線であらわすこととした。
- 文様の形態を推定した箇所については、破線であらわすこととし、全く不明な箇所については白抜きとした。
- 図は恒久性を願い、楮を主原料とした和紙に、墨および鉱物顔料を主として用い作成した。

### 注

- (1) 湖南省博物館編『長沙馬王堆1号漢墓』下巻 文物出版社 (1973) 図版 no.121
- (2) 『法隆寺とシルクロード仏教文化展』図録 法隆寺 (1988) p.146-149.
- (3) 正倉院宝物の内に裂類を中心とした法隆寺献納宝物の内、一部のものが混在することについては、奥村秀雄「上代裂に付いて」(上)・(下)『ミュージアム』no.389・390 東京国立博物館 (1983) p.4-14.p.4-18. 又、松島順正『正倉院よもやま話』学生社 (1989) p.37-42. ほか、これまでに幾人かの先学により紹介されている。
- (4) 「注(2)と同じ」
- (5) 『中国美術全集』工芸美術編 6 印染織繡 (上) 文物出版社 (1995) 図版 no.142
- (6) 小杉一雄『日本の文様-起源と歴史』南雲堂 (1988) p.22-30.
- (7) 注(6)において同氏は、「尺木が竜の体軀から消える頃、竜は昔ながらの宝珠を掴んだり、…」と述べている。
- (8) 法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝』第14巻 (1998)p.116. に、no.13紅地双龍連珠円文綾と称して、同種の綾であると思われる裂片が掲載されている。
- (9) シルクロード学術研究センター編「トルファン地域と出土絹織物」『シルクロード学術研究』8 (2000) Pl.63- no.25
- (10) 『西域美術ギメ美術館ベリオ・コレクション』II 講談社 (1995) 図版 no.117
- (11) 東京国立博物館編『法隆寺献納宝物銘文集成』吉川弘文館 (1999) 図版 p.23.
- (12) 沢田むつ代「正倉院頒布裂」『東京国立博物館紀要』33 東京国立博物館 (1998) p.74.
- (13) 佐藤昌憲・小西孝・川口浩・切畑健・橋本甫之「正倉院の繊維材質調査報告」『正倉院年報』16 (1994) p.1-26.
- (14) 黒板勝美編『新訂・増補国史大系』第26巻「延喜式巻24主計上」国史大系刊行会 (1937) p.598.
- (15) 『旅順博物館図録』座右寶刊行会 (1943) 図版 p.104.
- (16) 松本包夫『正倉院裂と飛鳥天平の染織』紫紅社 (1984) p.149.



図版1 彩絵鳥唐草文白布文様復元図 ×0.28



顕微鏡写真1  
南倉134-9 曝布彩絵半臂残欠 背面  
部分  
鴛鴦の飾り羽根（朱）×3.0



顕微鏡写真2  
同 獅子の舐  
（金・朱・緑・青）×18.0

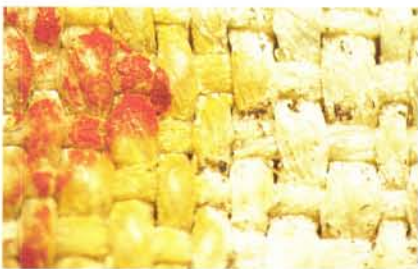


顕微鏡写真3  
同 獅子の後脚部裏（赤紫）×18.0





図版 2 彩絵獅子唐草文白布文様復元図 ×0.28



顕微鏡写真 4  
同 獅子の大腿部花卉形  
(朱・黄・赤味のある黒) ×18.0



顕微鏡写真 5  
同 飛蝶の羽根  
(透明感のある淡茶・黒) ×36.0



顕微鏡写真 6  
同 宝相華の花卉(青) ×3.0

# Research and Reconstruction of Designs in Some Textiles in the *Shōsō-in* – With Diagrams of the Reconstructed Designs –

ŌYAMA Akihiko

(Department Of Arts of Cultural Properties, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received April 27, 2001)

The intention of this study is to reconstruct the designs of 16 sorts of textiles in the *Shōsō-in* whose techniques are various such as twill weave silk, brocade, and painting in colors, on the basis of close investigation. In the course of this research, some important points are clarified. For instance, it is clarified that the coloring of *Bakufu-Saieno-Hanpi* jacket corresponds to a typical *Ungen* coloring of the Japanese Nara era.

**Key Words:** diagram of the reconstructed designs, textiles in the *Shōsō-in*